

てん菜 だより

2025.2

第 13 号



発行／一般社団法人北海道農産協会／〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 ☎011-221-2542 FAX011-221-1815
URL <https://hokkaido-nosan.or.jp>



てん菜育苗播種作業（常呂町）

てんさい

令和6年産てん菜は、褐斑病の発生量は平年より多かったものの、生産者の皆様の適切な防除などにより、発病の進展は概ね抑えられました。生育期間中の気温が総じて平年より高かったことから、糖分は低くなりましたが、収量は平年を上回っており、産糖量は前年を上回る見込みです。

てん菜は、北海道の畑作において、輪作体系の維持に欠かせない基幹作物であり、また、製糖工場は地域の雇用や経済を支える重要な役割を果たしています。一方で、作付面積は、農業従事者の減少や高齢化の進行、経営規模の拡大に伴う労働力不足などにより、減少傾向で推移しています。

また、砂糖の消費量の減少により、輸入原料から徴収している調整金収入が減少する中、糖価調整制度の収支が悪化したことなどから、てん菜糖の国内産糖交付金の交付対象数量を段階的に削減する方針が示されています。

砂糖需要の減少を食い止めるため、農林水産省で実施している「ありが糖運動」やJAGグループ北海道の「天下糖プロジェクト」、その他にも行政、糖業、団体、生産者など様々な関係者が、イベントや食育授業などにより、砂糖に関する正しい知識を発信し、砂糖の消費拡大やイメージアップに取り組んでいます。

私も、昨年、東京で開催されたイベントでてん菜と砂糖のPRを行ってきました。砂糖は食べると太る、糖尿病になる、漂白されているなどの誤った知識を持っている消費者がまだ沢山いることを実感したほか、てん菜から砂糖が作られていることを知らない消費者も多かったです。

普段はそれぞれの立場でてん菜に関わっていますが、砂糖の消費拡大の取組は関係者の誰もが、小さなことからでも実施できる取組です。真摯に、継続して取り組むことにより、消費者の意識や行動が変わることを期待しています。

(Y)

令和六年産 てん菜の生産実績とその要因について

道総研北見農業試験場 研究部麦類畑作グループ 主任主査 池谷 聡

1. はじめに

令和六年産のてん菜の受け入れは、12月30日をもって終了いたしました。全道平均の根重は71.34

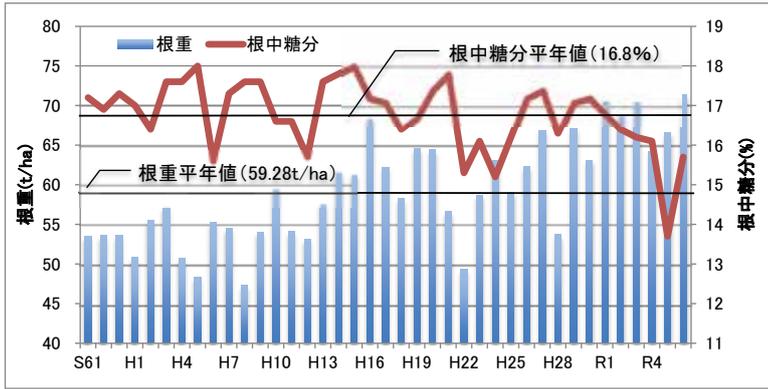


図1. 根重および根中糖分の推移 (全道平均)

注1) 平年値は昭和61年～令和6年の平均

t/ヘクタールで、糖分取引の始まった昭和61年からの平年値対比では120%と高く、この間では、最も多い値でした(図1)。また令和5年と比較すると、5t程度多くなっています。一方、根中糖分は15.7%で、昭和61年からの平年値より1.1ポイント低い値でした。このように、本年も低糖分傾向であったものの、昭和61年に糖分取引が始まってから最も低い値となった令和5年の13.7%と比較しますと、2ポイント高くなっています(図1)。このようなことから、令和6年の産糖量については、令和5年より作付面積が減少したにもかかわらず、過去、最も少なかった令和5年より、かなり改善することが見込まれます。

表1. てん菜の生育経過 (移植)

振興局	名	5月15日		6月15日		7月15日		8月15日		9月15日		10月15日	
		移植	生育	生育	生育	生育	生育	生育	生育	生育	生育	根周平年比	
道央・道南地域	石狩	0	早1	早1	早4	早3	早3	早3	早3	早3	早3	早3	102.3%
	後志	早1	早3	早2	早6	早8	早8	早8	早8	早8	早8	早8	110.3%
	胆振	早2	早5	早1	早2	早2	早2	早1	早1	早1	早1	早1	101.7%
道北地域	上川	早1	早4	0	早2	早3	早3	早3	早3	早3	早3	早3	102.7%
道東地域	オホーツク	0	遅3	0	早2	早6	早5	早5	早5	早5	早5	早5	104.0%
	十勝	早1	早2	早1	早3	早4	早5	早5	早5	早5	早5	早5	103.6%
	全道	0	遅1	0	早2	早5	早5	早5	早5	早5	早5	早5	103.7%

注1) 北海道農政部発表の「農作物の生育状況」より作成。

注2) 遅/早・数字は移植作業および生育の平年値からの遅早日数を示す。

注3) 「移植」、「生育」欄の赤字は平年値より早いこと、青字は平年値より遅いことを示す。

表2. てん菜の生育経過 (直播)

振興局	名	5月15日		6月15日		7月15日		8月15日		9月15日		10月15日	
		播種	出芽	生育	生育	生育	生育	生育	生育	生育	生育	根周平年比	
道央・道南地域	石狩	遅2	早2	早1	早4	早3	早3	早3	早3	早3	早2	早2	100.3%
	後志	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胆振	早1	早2	0	早2	早2	早3	早3	早3	早3	早2	早2	102.9%
道北地域	上川	早4	0	早2	早3	早3	早3	早3	早3	早3	早3	早3	103.5%
道東地域	オホーツク	0	遅1	0	早2	早3	早3	早3	早3	早3	早2	早2	101.0%
	十勝	早1	早2	早1	早4	早5	早6	早6	早6	早6	早6	早6	105.6%
	全道	早1	早1	早1	早3	早4	早4	早4	早4	早4	早4	早4	103.9%

注1) 北海道農政部発表の「農作物の生育状況」より作成。

注2) 遅/早・数字は移植作業および生育の平年値からの遅早日数を示す。

注3) 「播種」、「生育」欄の赤字は平年値より早いこと、青字は平年値より遅いことを示す。

2. 令和6年の気象と生育経過

令和6年の気象(図2)ならびに移植および直播栽培の生育経過(表1、2)を振り返ってみますと、春

先は天候に恵まれたため、移植作業や直播栽培の播種作業は、概ね順調に進みました。オホーツク地域など、一部の地域では、4月下旬の断続的な降雨のため、移植作業や直播の播種作業にやや遅れが出ました。定植・播種後は、周期的に降雨があったことから、移植後の活着、直播の発芽とも良好でした。十勝地方では、5月はじめに風害が発生し、一部で、再播種・補植対応となりました。

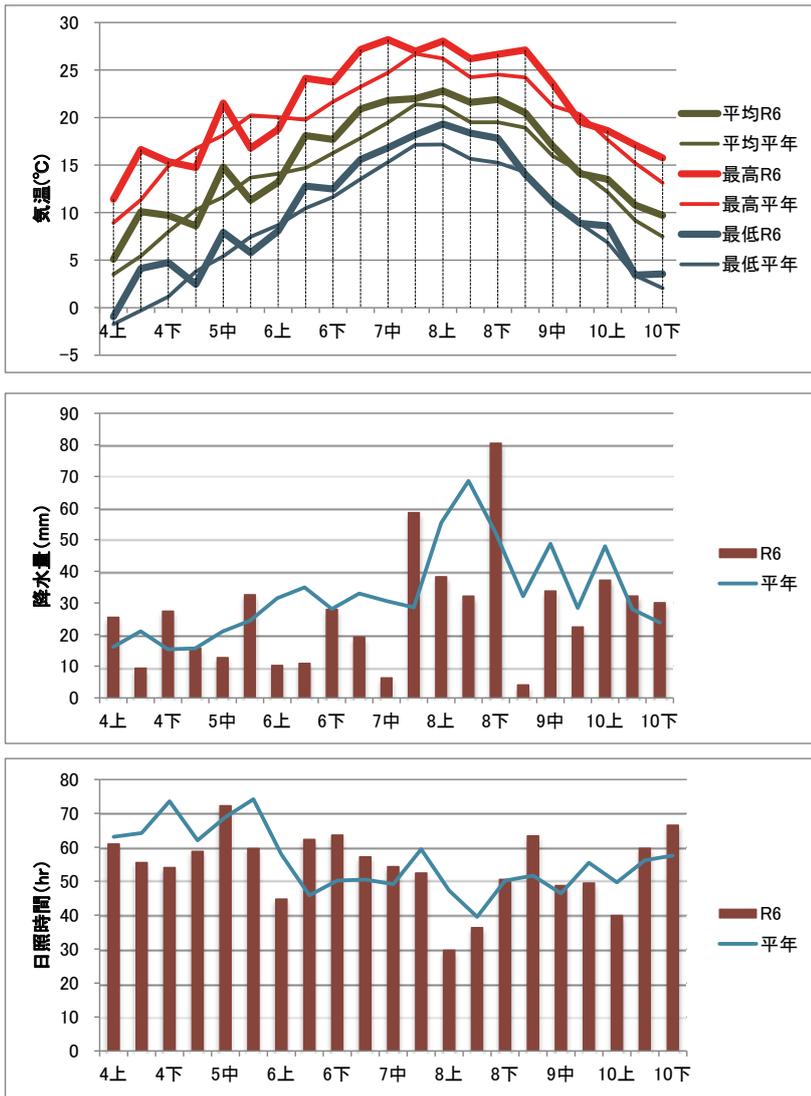


図2. 令和6年の気象経過 (全道平均)

注1) 気象値は、オホーツク、十勝、上川、空知、石狩、後志、胆振地域のアメダスデータを、てん菜作付面積に基づき加重平均して算出。

注2) 平年値は平成26～令和5年の10か年平均。

しやすいたが、7月下旬以降は、高温と多雨傾向が相まって、全道的に、発病が非常に進

況が続きました。夏の終わりから秋にかけては、令和5年では、夏場の高温傾向が9月の中旬まで続いたため、褐斑病の勢いが秋口まで止まりませんでした。令和6年は、幸いなことに、8月下旬から、特に最低気温が平年並みに低下したため、発病の勢いが止まりました。令和6年も、褐斑病は多発したものの、最終的な被害面積は、令和5年を1万ヘクタール下回る約1万6千ヘクタールで、被害面積のうち甚発生と多発生の合計面積は、令和5年の約6千8百ヘクタールから、半分以下の2千9百ヘクタールと大きく減少しました。令和6年のような褐斑病が蔓延しやすい気象条件の中で、令和5年より被害面積が減った要因として、生産者の皆様、令和5年以上に防除を徹底されたこと、8月下旬からの気温が低下したことが挙げられます。

展しやすいた。干ばつが解消された7月下旬以降は、高温と多雨傾向が相まって、全道的に、発病が非常に進

況が続きました。夏の終わりから秋にかけては、令和5年では、夏場の高温傾向が9月の中旬まで続いたため、褐斑病の勢いが秋口まで止まりませんでした。令和6年は、幸いなことに、8月下旬から、特に最低気温が平年並みに低下したため、発病の勢いが止まりました。令和6年も、褐斑病は多発したものの、最終的な被害面積は、令和5年を1万ヘクタール下回る約1万6千ヘクタールで、被害面積のうち甚発生と多発生の合計面積は、令和5年の約6千8百ヘクタールから、半分以下の2千9百ヘクタールと大きく減少しました。令和6年のような褐斑病が蔓延しやすい気象条件の中で、令和5年より被害面積が減った要因として、生産者の皆様、令和5年以上に防除を徹底されたこと、8月下旬からの気温が低下したことが挙げられます。

その後は、6月中旬より高温傾向になり、生育が進みました。7月上旬から中旬にかけては、十勝地域の中央部やオホーツク地域の沿海部など一部の地域で、降雨が非常に少く、てんさいの下葉が黄変したり枯れたりなど、干ばつの被害が出た地域もありました。これらの地域でも、7月の下旬に十分な降雨があつたことから、干ばつは解消されました。そ

の後は、9月上旬まで高温傾向が続き、降水量も十分であつたため、生育および根部の肥大が進みました。収穫期直前の10月15日の全道平均の生育の遅速は、生育中の高温傾向を反映して、移植で5日早く(表1)、直播で4日早く(表2)になりました。根周の平年比も全道平均で移植、直播ともに104%弱と、やや大きい傾向でした。

3. 病害虫の発生状況
令和5年に、各地で多発した褐斑病は、高温多湿条件で、発病が進展していきます。令和6年は、6月以降の高温傾向や、令和5年の多発による感染源の増加のため、平年よりも初発が早い傾向でした。初発後も高温傾向で発病が進展しやす

況が続きました。夏の終わりから秋にかけては、令和5年では、夏場の高温傾向が9月の中旬まで続いたため、褐斑病の勢いが秋口まで止まりませんでした。令和6年は、幸いなことに、8月下旬から、特に最低気温が平年並みに低下したため、発病の勢いが止まりました。令和6年も、褐斑病は多発したものの、最終的な被害面積は、令和5年を1万ヘクタール下回る約1万6千ヘクタールで、被害面積のうち甚発生と多発生の合計面積は、令和5年の約6千8百ヘクタールから、半分以下の2千9百ヘクタールと大きく減少しました。令和6年のような褐斑病が蔓延しやすい気象条件の中で、令和5年より被害面積が減った要因として、生産者の皆様、令和5年以上に防除を徹底されたこと、8月下旬からの気温が低下したことが挙げられます。

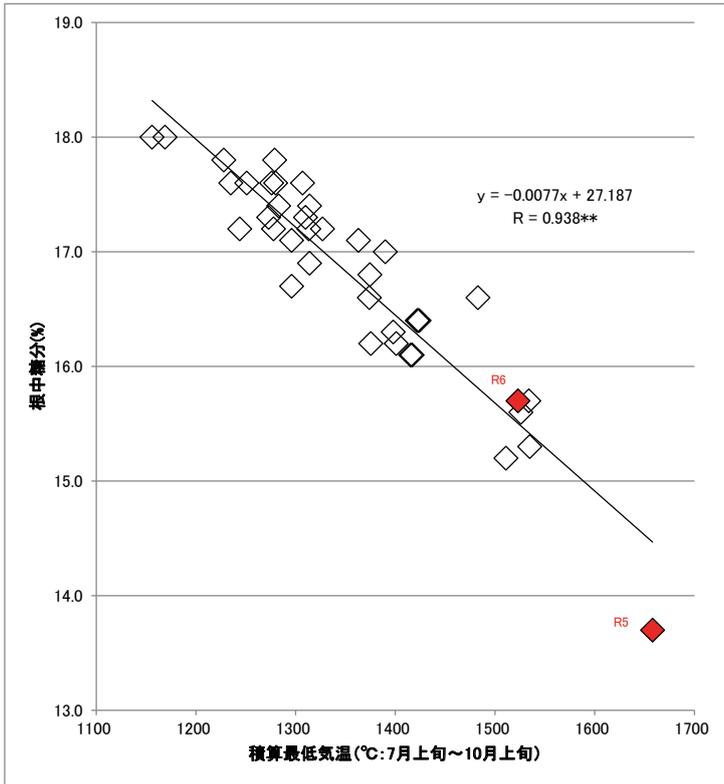


図3 夏から秋の積算最低気温と根中糖分の関係
(全道平均 昭和61年~令和6年)

注1) 積算最低気温：7月上旬～10月上旬の積算値。
注2) **:有意水準1%で有意であることを示す。

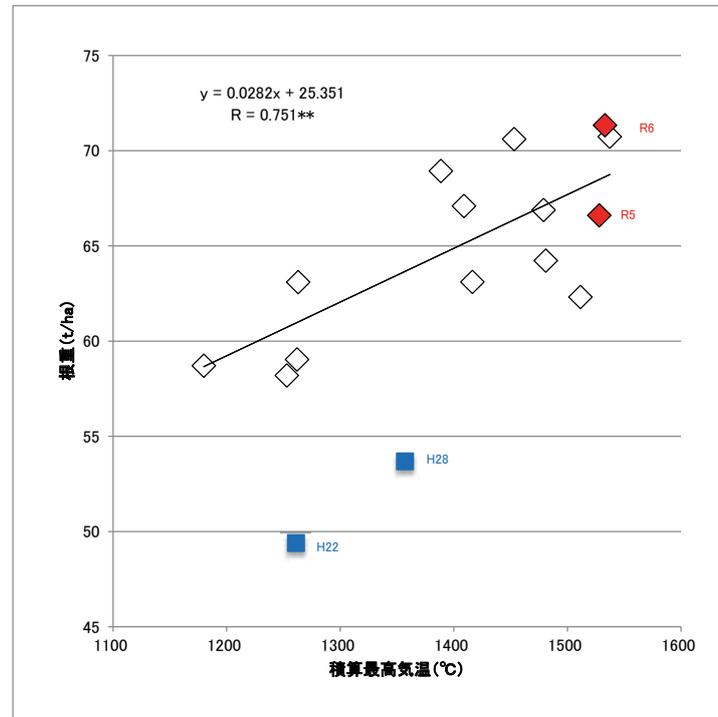


図4 春から初夏の積算最高気温と根重の関係
(全道平均 平成21年~令和6年)

注1) 積算最高気温：4月中旬～6月下旬の積算値。
注2) **:有意水準1%で有意であることを示す。

が発生し、被害を受けた地域もありました。黒根病を含む根腐病は、7月中旬までの降雨が比較的少なかったことから、少発生でした。また黄化病も少発生でした。

4. 気象とてん菜生育の関係

気象と全道平均の収量の関係についてですが、まず、図3に、夏から秋の積算最低気温と根中糖分との関係を示しました。てん菜は、この間の積算最低気温が高いほど、根中糖

分が低くなる傾向があります。この理由として、夜温が高いと呼吸による糖分の消耗が大きくなるためと考えられています。また、積算最低気温が高くなると、褐斑病が多発することがあり、このことも根中糖分の低下につながります。令和6年は低糖分傾向でしたが、要因としては、この間の積算最低気温が高かったことが挙げられます(図3)。しかし、令和5年よりも根中糖分は上昇しています。この要因としては、令和5

年と比べて褐斑病の被害が減少したこと、積算最低気温がかなり低かったことが挙げられます(図3)。

次に、図4に、春から初夏の積算最高気温と根重との関係を示しました。品種の根重の水準は、昭和61年からかなり向上しているため、平成21年以降のプロットとしました。また、平成22年と28年は、黒根病を含む根腐病が多発したため、根重が大きく低下した年なので、相関係数の計算からは除いています。この間の

積算最高気温が高いほど、根重は多くなる傾向があります。これは、初夏までの高温が初期生育を促進させ、その後の根部肥大につながるためと考えられています。令和6年は、この間の気温が例年より高く推移したため、積算最高気温は平成21年以降では最も高いレベルとなり、根重の増加に非常に好適な条件でした。令和5年の根重低下については、褐斑病の激発が悪影響を与えたと考えられますが、令和6年は褐

斑病の被害が減少し、根重への悪影響が減少したことも、根重が令和5年より多かつた一因であると考えられます。

5. 令和6年のまとめ

このように、令和6年も、高温がてん菜生産に大きな影響を及ぼしました。生育においては、初期の高温の影響で、根部肥大の条件が良好だったものの、中期から後期の高温によって、根中糖分が悪影響を受けました。また褐斑病の被害は令和5年より減少しましたが、やはり高温の影響で、発生自体は、平年よりかなり多い傾向にありました。さらに、ヨトウガやシロオビノメイガの発生が増えているのも、夏場の高温に原因があると考えられます。近年の地球温暖化の予測によると、今後は高温傾向が持続すると考えられています。そこで、今後に備えて注意が必要な点をいくつか挙げてみたいと思います。

6. 今後の対策など

令和5年に引き続き、令和6年に

も多発した褐斑病の対策についてですが、まず、できるだけ抵抗性が強い品種を活用することが重要です。近年、これまでの「強」や「かなり強」よりも強い「極強」の抵抗性を持つ品種が北海道の優良品種に認定されました。「極強」品種であれば、令和5年や6年のような高温多雨の気象条件でも、通常の防除体系より防除期間を短縮することが可能となります。また「かなり強」品種でも、「強」

や「やや強」品種より、通常の防除体系で被害を軽減することが可能となります。次に、防除についてですが、褐斑病がある程度広がってしまうと薬剤散布の効果が落ちてしまうので、褐斑病発生直後までに防除を開始することが非常に重要です。その後の定期的な防除では、薬剤の残効が切れて再び褐斑病が広がり始める前に、次の散布を行うことが効果的です。最も効果的な褐斑病防除薬剤であるマンゼブ剤は、残効が14日程度で銅剤などよりも長く、DMI剤やQ・I剤などのような耐性菌の発生も認められておらず、連続5回散布可能なため、褐斑病防除では中

心となります。通常条件では、14日間隔が散布の基本となりますが、令和5年や6年の夏期のように、高温で急激に発病が進む場合には残効が短くなるため、散布間隔を10日以下に短縮する必要があります。さらに、マンゼブ剤を、最も病気が激しく進展する8月中旬に重点的に散布できるように薬剤のローテーションを組むことも重要です。

褐斑病以外の要因による根中糖分の低下については、適正な施肥管理を行い、必要以上の窒素分を施肥しないことや、湿害に備えて十分な透排水対策を行うこと、さらに低糖分になりやすい圃場では、高糖分型品種を作付けすることなどの対策が重要です。近年の高糖分品種では、糖量が、根重型品種に引けを取らないものも出てきています。

令和6年は黒根病を含む根腐病の発生は少なかつたですが、高温年で、6月から7月に降水量が多ければ、多発することが多く、多発すると根

重に大きな悪影響を与えるので、黒根病の対策も重要です。まず圃場の基盤整備や心土破碎など、透排水対

策を十分行うことが基本です。その上で、抵抗性品種の作付けが効果的です。特に本病が発生しやすい圃場では、抵抗性が「強」の品種を作付けてください。直播栽培の場合は移植栽培以上に「強」品種が有効です。また、移植栽培では殺菌剤の育苗ポット灌注処理、直播栽培では7月上旬の殺菌剤株元散布も効果があります。

近年、病害発生がますます激しくなり、低糖分の年も頻発しています。このことに備えて、高度病害抵抗性と高糖分、高糖量を兼ね備えたてん菜品種の育成が進んでいます。今後、安定したてん菜生産のために、条件に応じてこのような品種を活用していただくことが重要です。今後とも農業試験場を含む関係機関は、このような品種の育成に努力していくとともに、有益な情報の提供に努めて参りますので、積極的に活用していただければ幸いです。



北農研センター庁舎

テンサイのポテンシヤルと北海道の品種開発

北海道農業研究センター 黒田 洋輔

私たちが日常的に食用としているイネ、ムギ、ダイズなどは、数千年以上も前から品種改良されてきた作物です。それに比べて、テンサイは、その歴史がたった二五〇年程度です。これは、テンサイが極めて短時間で発展できるポテンシヤル（潜在能力）を持つていたことの証左といえます。

ヨーロッパでの品種改良・商業生産が先んじていたテンサイが日本国内へ初めて導入されたのが一八七〇年です。その後、札幌農学校に招かれていたクラーク博士の勧めや試作を経て、北海道の畑作へ定着してきました。導入当時の生産には様々な問題が認められましたが、品種改良や栽培技術に対する先人のたゆまない努力が続けられ、今日では、北海道内各地の製糖所が地域の経済的な振興の役割を担う重要な産業としての発展を遂げています。

日本国内の育種については、北海道農事試験場で行われ、一九六〇年に設立された特殊法人てん菜研究所ではさらに精力的に進められました。同研究所は一九七三年に解散し

ましたが、その業務は農林水産省北海道農業試験場（現北海道農業研究センター）へ引き継がれています。現在、北海道農業研究センターは、テンサイの育種を行っている日本国内で唯一の機関です。

ヨーロッパ並みの収量水準が達成された現在でも、継続的な品種開発は必須です。例えば、最近では、気象の影響を受け、テンサイの生産量は年次によって大きく変動しています。これは、テンサイはそもそもヨーロッパ原産であり、乾燥した夏の気象条件に適応した植物種であることと関係します。世界のテンサイ栽培面積の大部分（七割ほど）を占めるヨーロッパでは主に地中海性気候と西岸海洋性気候に分類される地域で作付けされています。一方、北海道

は、亜寒帯（亜寒帯湿潤気候）であり、ヨーロッパに比べて、春の気温が低く、夏の降水量が多い特徴があります。とりわけ夏の高温かつ多湿の条件は、様々な病気を発生させる原因となります。

北海道のテンサイの主要な病害は、褐斑病、根腐病、黒根病、そう根病です。褐斑病は、葉や葉柄に斑点や褐変枯死の症状を引き起こします。防除が重要ですが、耐性菌も多いことに加え、長雨等で適期防除を逃すと、感染が拡大しやすいため、品種の抵抗性は有効な対策の一つです。根腐病は、葉柄基部や根部に黒褐色の壊死症状を引き起こします。スポット状に発生し、畑全面に発生することはありません。防除や連作を避けることが、重要な対策の一つです。黒根病は、根部に黒色の壊死症状を引き起こします。現在は、有効な薬剤がなく、品種の抵抗性に依存せざるを得ません。そう根病は、病原ウイルスの感染により、根重および根中糖分の低下を引き起こします。感染を媒介する糸状菌は十年以

上も土壌中に生存できることから、一度発生すると防除が極めて困難な病害です。

北海道農業研究センターでは、日本的高温多湿な夏の気象条件への適応拡大を図るため、その気象条件によって助長される複数の病害に対して

てんサイの病害の発生面積のうちの大部分を占める褐斑病および黒根病に対する抵抗性が優れる品種として、二〇一二年には「北海みつぼし」、二〇一八年には「カチホマレ」が優良品種に認定されました。これらの品種は、黒根病が発生しやすく、褐斑病の適期防除が困難な排水不良畑を中心とする作付けで、てんサイの生産と農家所得の安定に寄与できると考えられます。両品種の黒根病抵抗性は、現在の普及品種の中では最高ランクの「強」です。なお、先に認定された「北海みつぼし」は、世界で最初に普及した黒根病抵抗性の品種であり、黒根病抵抗性が「強」の普及品種は、令和6年までに「北

海みつぼし」と「カチホマレ」のみです。現在も生物系特定産業技術研究支援センターのオープンイノベーション研究・実用化推進事業の支援を受けて、これまで以上の複合病害抵抗性の品種開発を目標にてんサイの育種や研究を推進しています。

前述の品種が有する複合病害抵抗性は、北海道農業研究センターが保有する遺伝資源の中から発掘されたものです。今後は、気象変動や、これまで育種の対象となっていなかった病害への備えも必要です。同セン

ターの種子庫(サブバンク)には、世界でも特殊な気象条件で育成されてきた材料に加え、世界各地から収集された野生種を含む多くの種類の材料が種子として保管されています。その数は、既に数千点に達し、世界有数の遺伝資源となっています。この膨大な遺伝資源こそが、次世代のてんサイを発展させるポテンシャルといえます。



種子 (多胚・単胚)

令和6年度 原料てん菜糖分測定センター 点検(操業前・立入)報告

北海道農産協会は、「原料てん菜測定要領」に基づき、各製糖所等に設置されている原料てん菜糖分測定センターの点検(操業前・立入)を実施致しました。

操業前点検については、操業が開

※点検内容は、操業前点検・立入点検とも同一項目で実施。

《点検内容》

- ・ ソウマシンの 薬液循環装置
- ・ ディスペンサー・攪拌装置
- ・ 糖分測定機
- ・ ろ過装置

《点検結果》

全道5工場・1事業所の糖分測定装置を点検した結果、全ての測定系列が良好であることを確認しました。



芽室 点検状況 (ディスペンサー)

令和6年産 てん菜生産実績 (総合振興局・振興局別)

総合振興局・振興局名	作付面積 (ha)	内直播		収量 (t/ha)	生産量 (t)	平均糖分 (%)	栽培農家戸数 (戸)	1戸当り面積 (ha)
		内直播	直播率					
空知	552.14	515.23	93.3%	80.50	44,444.69	15.7	144	3.83
石狩	973.22	765.59	78.7%	68.78	66,934.68	15.5	134	7.26
後志	1,070.05	570.23	53.3%	64.11	68,604.74	16.3	207	5.17
胆振	1,035.10	757.36	73.2%	63.42	65,647.25	15.9	194	5.34
日高	17.63	13.95	79.1%	55.48	978.05	15.3	4	4.41
渡島	85.49	56.93	66.6%	44.05	3,765.70	14.0	19	4.50
檜山	264.38	126.22	47.7%	59.76	15,798.26	15.8	35	7.55
上川	2,881.80	2,111.04	73.3%	72.54	209,037.84	15.7	512	5.63
留萌	161.28	144.81	89.8%	46.98	7,576.36	16.2	24	6.72
オホーツク	19,913.04	6,383.37	32.1%	69.97	1,393,380.27	15.6	2,097	9.50
十勝	21,547.14	13,130.70	60.9%	73.63	1,586,443.33	15.8	2,579	8.35
釧路	249.70	0.25	0.1%	69.24	17,289.10	15.6	14	17.84
根室	95.71	11.03	11.5%	51.48	4,926.94	15.7	10	9.57
合計	48,846.68	24,586.71	50.3%	71.34	3,484,827.21	15.7	5,973	8.18



令和6年度てん菜の主要病害虫発生状況

病害虫	年次	発生面積 (ha)		被害面積 (ha)		発生程度別面積 (ha)					防除面積 (ha)		概評	
		率 (%)	率 (%)	無	少	中	多	甚	実面積	延面積	初発期	発生量		
褐斑病	R6年	42,465	86.9	15,241	31.2	6,382	27,225	12,467	2,382	391	48,847	339,375	早	多
	R5年	47,301	92.6	24,187	47.4	3,780	23,114	17,938	4,874	1,375	51,081	310,939	早	多
	平年	20,313	35.8	4,333	7.6	36,439	15,980	3,495	685	153				
根腐病 (黒根病含む)	R6年	2,588	5.3	52	0.1	46,258	2,537	52	0	0	48,655	92,565	—	少
	R5年	3,588	7.0	65	0.1	47,493	3,523	65	0	0	50,857	96,915	—	少
	平年	5,679	10.0	594	1.0	51,073	5,085	501	68	25				
そう根病	R6年	10	0.0	0	0.0	48,837	10	0	0	0	0	0	—	少
	R5年	277	0.5	0	0.0	50,804	277	0	0	0	0	0	—	並
	平年	199	0.4	0	0.0	56,553	199	0	0	0				
黄化病 (西部萎黄病)	R6年	717	1.5	0	0.0	48,130	717	0	0	0	47,637	122,609	—	少
	R5年	463	0.9	0	0.0	50,618	463	0	0	0	49,563	136,786	—	少
	平年	—	—	—	—	—	—	—	—	—			—	—
ヨトウガ (第1回)	R6年	9,643	19.7	421	0.9	39,204	9,222	421	0	0	48,847	82,846	並	並
	R5年	10,507	20.6	442	0.9	40,574	10,065	437	5	0	51,081	84,150	並	やや多
	平年	8,601	15.2	383	0.7	48,151	8,218	380	3	0				
ヨトウガ (第2回)	R6年	8,783	18.0	357	0.7	40,064	8,426	357	0	0	48,847	77,980	並	やや多
	R5年	8,703	17.0	370	0.7	42,378	8,333	365	5	0	51,081	77,903	やや早	やや多
	平年	7,411	13.1	208	0.4	49,341	7,202	208	1	0				
テンサイ モグリハナバエ	R6年	446	0.9	0	0.0	48,401	446	0	0	0	47,361	73,779	並	並
	R5年	155	0.3	0	0.0	50,926	155	0	0	0	42,812	55,377	並	並
	平年	257	0.5	0	0.0	56,495	257	0	0	0				

北海道病害虫防除所のまとめるによる。
 令和5・6年とも北海道病害虫防除所のまとめるに基づき、北海道農産協会にて各面積を調整・作成
 (てん菜実測面積 令和5年51,081ha 令和6年48,487haにて算出)
 平年：平成26年～令和5年の10ヵ年平均

北海道農協青年部協議会との意見交換から見たもの

北海道畑作の適正な輪作体系に欠かすことのできないてん菜の耕作者や作付面積の減少が続いております。

こうした中、北海道農協青年部協議会畑青班の皆様と2度の意見交換を行い、てん菜・てん菜糖生産への思いを伺いました。

1. てん菜・てん菜糖生産の必要性について

(1) てん菜作付け意向を示すが、作付け制限の煽りを受け一度は作付けを見送ったが、て

ん菜後作での他作物の収益と除草効果にも大きな効果を得られることが確認できたので、てん菜を輪作に組み込みたい(引頭)

(2) てん菜は他作物と同様に手間暇はかかるが、作



業体系(家族経営)を確立することが重要ではないかと感じている。

一定の期間内での作業完結(畑作物全般)、適期防除に努めるこ

とが省力化に直結すると感じているので、てん菜に限らず作業体系が確立できない場合(作業が後手に回る等)は間違いなく苦悩すると思う。(東城)

(3) R9年以降の先行きが不透明な



状況。生産者は、2年後3年後のことも

視野に入れた経営をしている為早急な政策方針に期待したい。

糖業との連携が不可欠であると感じている。糖業の存在・存続は地域住民・関連産業にも多大なる影響を与えていることを改めて実感している。(平)

(4) 意見交換会を通じて、お砂糖に



なるまでの工程とお砂糖に含まれる効果を広める必要

性を実感できたので、砂糖そのものに対する理解向上に尽力していきたい。

各種セミナーや普及活動を通じて地道で時間はかかるがてん菜そのものの存在を認識させていくことが重要と感じている。(不動)

(5) てん菜は北海道農業に欠かせな



い作物であり、輪作体系にも欠かせない作物でもある。

再度てん菜が重要な作物であることに理解を求めていきたい。輪作上他作物との相乗効果も期待できる(収益面・除草対策)ことも併せて広めていければと感じている。

秋の北海道は製糖工場の操業で活気づく。地域にとつては重要な産業の一つであり、生産者も含め雇用の場・働く場所にもなっている大きな産業の一つでもある。

てん菜は、あらゆる関係者・関係機関と共にあり、北海道には欠かせない作物であることに間違いはないと改めて感じる事ができたとと思う。(佐藤)

2. 今後に向けて

(1) てん菜に対する思い
青年部の皆様のてん菜に対する思いや期待として、

① てん菜は輪作において重要な作物であり、ないと輪作が回らなくなる。水田転作にも組み込める作物でもある。

② てん菜には魅力はあるけど、労働力を如何に要することが課

題であり、防除をはじめとした省力、高能率機械の活用が必要(佐藤・東城・平)。

といったご意見があり、農業経営におけるてん菜の重要性を再確認するとともに、省力化についても多様な観点から対応の方向性を探っていることも感じさせられた。

また、大前提として、「輪作体系を維持する」ことが、農家経営にとつて欠かしてはいけないことも改めて理解できた。輪作体系を維持することで畑の負担軽減にも繋がり、更にはてん菜の後作への効果(除草効果)にも繋がるので、輪作の間隔(4品以上)が空けば空くほど効果は強くなる。

てん菜の収益性の高さは生産者には大きな魅力となっており、それによる他作物への相乗効果にも着目したい。

この件に関しては、てん菜の作付けを検討、てん菜作付けに興味のある生産者に対する良いメッセージとなると思う。近年てん菜をめぐる生産環境が良くない中で、青年部畑青班からのこの様な発言はてん菜生産意欲を掻き立て

る追い風になることを期待したい。

(2) お砂糖に対する思い

青年部の皆様より、お砂糖のイメージを伺い以下のような意見を伺った。

① てん菜がお砂糖の原料であるとの認識が低いことに懸念している。

② 消費者はサトウキビからお砂糖ができるイメージが強い

(引頭・東城)

③ メディアの影響もあるがお砂糖そのものに悪いイメージ（カロリーが高く太りやすい等）を持たれているので、お砂糖の正しい知識を如何なる方法で発信するかが重要ではないかとの意見を伺った。

お砂糖と人工甘味料の違いは、実際に比較して初めて理解する消費者が大半だと思つたので、天下糖一PJの一環として、高校生を対象としたハイスクールセミナー、幼稚園児とその親を対象とした親子参加型の食育セミナー等で認知度を深める取組を地道に進めることも必要ではなからうか。青年部の取組においても組織全体でお砂

糖に対する認知度を深めていけるよう期待したい。

(3) 地域経済・糖業に対する思い

青年部の皆様の地域経済・糖業への強い思いを伺った。

① 製糖工場が一つ無くなり製糖工場が地域経済に及ぼす貢献度が如何に大きいものであるかを青年部役員全員で再認識した処(全員)。

(2) 生産者は2年後3年後の経営

を見据えているので政策の方向性が不透明では生産意欲に繋がることがも理解してほしい。(佐藤) 北海道農協青年部協議会畑青班の役員の皆様からお話を伺い、改めて輪作の重要性と共に製糖工場が如何に経営や地域産業に対するプラス面の大きな効果があることを認識し、てん菜生産に取り組み生産者が増えることを期待したい。

3. 総括(まとめ)

北海道農協青年部協議会畑青班との意見交換を通じて、てん菜は収益の出る、儲かる作物であることから、如何に無駄な作業を減らし適期に防除を終わらせる経営体系を確立でき

るかが重要と感じさせられた。

近年の猛暑により褐斑病が激発し

過去にない低糖分となり、更にはR8年までの国の政策が出るなどてん菜にとって良い環境ではない状況ではあるが、輪作上欠かすことのできない、北海道には欠かせない作物であるてん菜の作付けを今後も維持・継続していこうとする強い思いを感じる事ができた意見交換となった。今後も彼らとの意見交換を通じて色々な角度から情報発信ができたらと感じることができたので、今後も青年部との意見交換を継続していきたい。



北海道農協青年部協議会畑青班
左から、引頭・東城・平・不動・佐藤

令和6年度
高品質てん菜づくり
講習会

令和6年度「高品質てん菜づくり講習会」は、十勝会場（芽室町めむろーど）で2月5日（水）に実会場とオンライン配信で開催する予定で準備していましたが、この度の十勝地方の大雪の影響を受け、延期することと致しました。

講演の視聴を予定されていた方々には大変ご迷惑をお掛け致しますが、ご理解頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

今後の対応については、改めて当協会HPにてご案内させて頂きます。

<https://hokkaido-nosan.or.jp/>



北海道農産協会ホームページ